

進学選択ガイドンスに寄せて

高橋 典幸(文学部)

進学情報センターニュースに何かコラムを、と頼まれて引き受けてしまいましたが、いざ何を書こうかという段になってハタと困ってしまいました。私も三十数年前の駒場生で、たしかに駒場から文学部に進学したのですが、進学選択(当時は「進学振分け」といいました)に関してこれといった記憶・経験がないのです。というのも、小学生のころからの歴史好き・日本史好きで、そのままわき目もふらず、「まっすぐ」文学部の国史学専修(現在の日本史学専修)に進んだのでした(しかもその後も日本史学の教員をつとめています)。ですので、進学にあたって何か悩んだり、考えたりという経験がほとんどないのです。おまけに当時の国史学専修は定員割れが続いていたので(「底抜け」といわれていました)、平均点というプレッシャーからも無縁でした。

ただ昨年度(令和5年度)から文学部の教務委員長を務めることになり、職務柄、進学選択に関わることになりました。三十数年越しで進学選択と向かいあうことになったわけですが、そこで進学選択というのはなかなか奥の深い制度であるとあらためて認識するに至りました。

そのきっかけの一つが、進学選択ガイドンスに出席するようになったことです。進学選択にあたって、各学部の特徴を説明するガイドンスで、1年生対象の12月と進学選択直前の2年生対象の5月の、年2回開催されます。学部ごとにそれぞれ工夫したガイドンスが行なわれるのですが、私も教務委員長として文学部のガイドンスに出席しています。

文学部の進学選択ガイドンスは二部構成になっていて、第一部は文学部全体の紹介、第二部は専修ごとの紹介という段取りになっています。とくに注目されるのは第一部です。第一部では文学部の全27の専修がそれぞれの特徴を1分ずつで一気に紹介していくという趣向(通称「一分紹介」)になっていて、なかなかの圧巻です。文学部に少しでも興味・関心がある方にはぜひ参加してもらいたいと思っています。

この「一分紹介」を通じて、文学部には実にいろ

いろなジャンルの専修があるものだと痛感させられると同時に、文学部における学問のあり方についても考えさせられます。

実は私は駒場生のころ、また文学部に進学後も長らく、「文学部とは文字で書かれたテキストをもとに勉強するところだ。文学部の学問とはそういうものだ」と思っていました。『日本書紀』や『吾妻鏡』など日本史の史料は文字で書かれています。東洋史や西洋史も外国語で書かれた文献を使って勉強しなければなりません。このよう並ぶと、歴史とは過去の人びとが書き残したテキストを通じて勉強するものと思われるかもしれません。

ところが、「一分紹介」で考古学専修課程の説明を聞くと、こうした認識は一変してしまいます。考古学が対象とする時代はたいへん広く、近現代はもちろんのこと、我々の祖先が文字を発明する前の時代も扱っています。すなわち考古学は文字ではなく、遺物や遺跡など過去の人びとの生活の痕跡を通じて歴史を学ぶのです。このように考えると、文字で書かれたテキストも遺物や遺跡も歴史にせまるための手段・材料にすぎず、歴史とはこうした様々な手段を通じて人間のこれまでの営みを明らかにする学問なのだということに気づかされます。

また「一分紹介」を聞いて印象深かったのが心理学専修です。心理学にもさまざまなジャンルがありますが、生物学や医学、あるいは工学といった、一見したところ文学部とは関係なさそうな分野と深いつながりを持っていることがわかります。そうすると、「なぜ心理学専修は文学部に所属しているのか?」と疑問に思われるかもしれませんが、それはそうしたさまざまな分野の知見もふまえながら、人間のこころを解き明かそうとしているからといえるでしょう。

他のさまざまな専修も同じです。思想や文学作品等を通じて、究極的には「人間とはなにか」を明らかにしようとする、それが文学部における学問といえるでしょう。もちろん文字は人間にせまるための重要な手がかりではありますが、文学部が対象とする世界はそれだけではありません。「一分紹介」はそうした文学部の世界の一端に触れる絶好の機会になることと思います。もし私が駒場生のころに進学選択ガイドンスがあり、「一分紹介」に接したならば、「まっすぐ」進学しなかったかもしれません。

ところで、これは他の学部もそうだと思いますが、文学部にはこれまで名前も知らなかったような魅力的な専修が並んでいます。ただ魅力的だからといって、「一分紹介」だけで進学先を決めるのは「危険」でしょう。文学部の進学選択ガイダンスでは第二部、専修ごとの紹介を設定していますので、そこでより詳しい話を聞いたり、気になっていることをたずねてみたりしてください。

進学選択ガイダンスはあくまでもきっかけと考えるください。より大事なものは、ふだんの駒場での勉学だと思います。

東大に入学し、駒場の授業を受け始めた段階で、高校までの勉強とは大いに違うことをすぐに体感する（体感している）ことと思います。それこそ駒場では数多くの、これまで見たことも聞いたこともなかったような授業が開講されています。最初のうちは暗中模索でいろいろな授業に出るというのが実情なのではないかと思いますが、それは決して無駄なことではありません。いい意味での試行錯誤ができるのが駒場のよいところです。それをくりかえしていくうちに徐々に自分の興味や関心が明確になり、自分にふさわしい進学先を意識するようになったところに、進学選択ガイダンスが行なわれるのです。駒場での勉学があってこそその進学選択と考えてください。

進学選択は東大にユニークな制度です。見方を変えれば、東大は他の大学に比べて専門課程が始まるのが遅いということでもあります。たしかに3年生の春に専門課程に進学し、4年生の春には卒業することになるので、専門教育を受けることができるのは実質的には2年未満しかないということになります。この短い期間で専修の基礎をマスターし、さらに卒業論文を仕上げるのはたいへんなことではありません。

ただより大事なものは、自分の興味・関心にあった専門（専修）を見つけることだと思います。これは見方によっては卒業論文を仕上げるよりも難しいことかもしれません。くり返しになりますが、駒場での日々の勉学を通じて見つけてくるしかありません。そうした意味で、進学選択というのはなかなか奥深い制度だと思います。実際、専門課程に進学した多くの学生は二年未満という短い専門教育期間のなかでも立派な卒業論文を書き上げています。

もちろん駒場での勉学は進学選択のためだけにあ

るわけではありません。駒場でしかできないこともたくさんあるはずですので、とにもかくにも悔いのない駒場ライフも楽しんでください。

なお先ほど「これまで名前も知らなかったような魅力的な専修」といったことに関連していえば、「これまでもよく知っている専修」もあるということになると思います。私の所属している日本史学などはその最たるものだと思いますが、「日本史なんて小学校のころから勉強しているから、もういいや」などとは思わないでください。同じ日本史でも、大学で学ぶ日本史は、それが魅力的かどうかはともかくとして、高校までのそれとはおおいに違います。このあたりのことはそれぞれ進学選択ガイダンスの折りなどにもう少し詳しくお話することができればと考えています。

冒頭で述べましたように、私には自分自身の進学選択（進学振分け）にほとんど記憶も経験もありません。そのような人間が書いた文章にどの程度の説得力があるか、はなはだ心もとないというのが正直なところです。そこで、最後にとてもためになるサイトを紹介して、この拙文を閉じたいと思います。文学部のホームページに「教員紹介」というコーナーがありますが、その中に「教員エッセイ「私の選択」」というページがあります。文学部の先生方がこれまでどのような選択をしてきたかということが書かれたエッセイが集められています。進学選択の話だけではありませんが、いろいろおもしろいことが書かれていますので、一読されることをお勧めします。